

若葉のころ

岡本 悠

孝之は、思い出していた、若葉のころを...

あの一連の冬を、どう描こう

バーのママである、若葉

「わたしは、結婚をしない」と云った

それが、強がりなのか、理由があるのかは、わからない

夢乃と同居しているから、

それで、万事うまくいっているのかもしれない

ある時、若葉は聴いた

「孝之さんは、親の面倒は、どうするの？」

俺は、兄が、

と、答えた

一人っ子である若葉は、自分が世話をしないといけないと話していた

若葉は、自分の店を持ちたい、そこがゴールかな、幸せかな、

と、話した

若葉の、謝肉祭の日、俺は欠席した

若葉となら、深い話ができると思った

しかし、2人きりならできたが、他に誰かいるとできなかった

それが、もどかしかった...

俺が、洋子にピースサインを送った時、

俺が、オレオレダンスを踊った時、

若葉は、こっちを何かを考えるように見ている

俺は、とんねるず、の、木梨憲武さんが好きだ、と話した

何か、決定的なことを隠している

まあ、俺に言うことでもない何かを...

そんな気がした

アジサイが、咲いていた

ひとつ言ってもいい？ 俺は構えた

なんだろう？

柿ピーの、ピーナッツを、いつも、綺麗に残して帰るね

アハハッ！ そんなことか

俺は、腹からわらった

ネネは、今日も来なかった

若葉は、スピードのステディを唄った

若葉は、バレンタインデーの記念に、小さなチョコレートをくれた

最初、このバーに来た時は、ネネがホットコーヒーを入れてくれたが、

しだいに、若葉が作るようになった

最後の日だけは、温かい玄米茶だった

アルプスの少女、ハイジは言った

「私は、自由になりたいの」

一律、俺には、関係のない話をした

そして、思った

もう、自分のことを話そう

仕事を辞めた

俺は、身のすべてをさらけだした

別に、若葉から、何かを聴き出したいのではなく

楽になりたかった

若葉は言った

私が、医者に行ったら、何個、病気があるかわからない

その意味がわかるようであり、やはり、よくわからなかった

剣道部にいたと言った

強かったらしい

ただ、強すぎたために、イジメにあっらしい

イジメというか、ねたまれただけかもしれない

それで、剣道部をやめた、と

俺は、イップスで、野球部をやめた

俺は言った、「父親を、殴ったことはあるけど、パンチ力がなさすぎて、全然痛がらなかったよ」、と

若葉は、俺のような、病気持ちの子が、面接を受けにきたけど、ちょっと駄目だった、という話をしていた

ハクエイが「愛に気づいてください」と言うと、僕が抱きしめて「アゲル！」と唸った！

若葉は、どんなお客さんに対しても、ちゃんと、客として、1人の人間として、対応していた

最近の歌は響かないな、でも、現代にもついていくけどね、と話した

演歌は、私たちには、敵いません、と、謙遜した

若葉は、嘘はつけない、と、言っていた、

だから、嘘は言うんじゃない、と、心の中にしまっておくのだろう

キンキキッズは、もうだいぶ歳を取っていた

最初に言った言葉を、ちゃんと覚えていた

「給料で、稼いだぶんを、この店に通うお金に使いたい」と、

ただ、俺は、お金には困っていなかった

それよりも、行く意味を見いだせなかった

目的があれば通えたが、もう、目的がなかった

静かに、サイレンが鳴った

もう、ネネも愛していなかったし、

若葉とも、話すことがなかった

俺は、フワリと宙に舞った

また、土・日になれば、バーの前を横切る

その度に、見つめる、あそこ

もう行かないのだろう

もう会わないのだろう

若葉は、新幹線でタバコを吸っていた

いつものように

「完」